

「勉強が出来る」ということ

行いて余力あらば即ちもって文を学ぶ

山下 太郎

日本では「勉強が出来る子」と言えば、試験で成績の良い生徒のことを意味するが、同じ言葉を世界の中で用いれば、それは「学校に通って勉強できる恵まれた環境にいる子ども」を意味する。世界広しといえども、日本ほど長時間「勉強出来る」特権を子どもが享受する国はほかにない。

だが、「勉強出来る」環境は当たり前のものではない。親は子に対しまじめに勉強に向き合う大切さを伝えるべきだが、それ以上に、勉強以外に価値あることがたくさんあることも教えなければならない。勉強は親が頼んで子どもにしてもらうものではけっしてない。

「勉強より大事なこと」は何か。もとよりこの問いの答えは一つではない。親は自分の言葉で子どもに自分の考えを伝えてほしい。人が生きる上で大切なことは何か。親が自分の経験や夢、思いの丈を具体的に語らなければ、子どもはどこでそれを学ぶのだろうか。勉強は勝ち負けを争う個人的問題ではなく、社会がそれを必要としている大切な営みであるということ、それゆえ、親も社会の一員としてそれを応援するというメッセージを伝えてほしい。同じ意味で、親は家事の手伝いなど、子どもにできる家族としての責任の遂行をたくさん経験させ、人間として生きる自信をつけさせなければいけない。

このような家庭教育をなおざりにし、ただひたすら大学合格をゴールと見立てた勉強に子どもたちを駆り立てることは不毛である。事実、100点以上取れない仕組みの試験の中でいくらい成績を取ったとしても、そのこと自体にどれほどの意味があるのだろうか。試験で問われる内容は、あらかじめどこかで出題された問題であり、少なくとも答えの出ている問題ばかりなのだから。

一方、大学に入って行われるのは、未知の領域(100点の枠を超越した世界)における知的冒険であり、その成果は何より社会が必要としている。人間としての基本ができず、100点主義の狭い価値観の中で生きてきた者は、大学における「学問」の使命を知ることもなく、「早く答えを教えてほしい」とすがるほかない。

「基礎学力」と「自ら学ぶ姿勢」 今の大学生に一番欠けている二点であると思う。大学の先生に尋ねてもこの見解に異論はないはずだ(もっと多くのため息と愚痴が出てくるかもしれない)。しかし考えてみると皮肉な現象ではある。これほど受験産業が発達し、子どもたちは小学校の低学年から進学塾に通い、中学入試では世界一難解な問題を解きこなしているというのに。いったい何が欠けているのか？

私はまず上で述べたように、人間としての心構えが大切ではないかと問題提起したわけである。この問題を棚上げし、あるいは人任せにし、目先の正式に一喜一憂するだけでは「なぜ学ぶ(学べる)のか？」という意識が希薄なまま、合格という「ゴール」(本当はスタート)にたどり着いても、すぐにしゃがみこんでしまう恐れがあるだろう。

次に、技術面について言えば、何より基本を大切にすることである。私は今の子どもたちが学校の勉強を軽視しすぎているように思う。勉強のコツはシンプルなものであり、特別なテクニックや秘伝があるわけではない。大切なのは授業に臨む張りつめた気持ちであり、それには予習と復習が欠かせない。予習によって授業中の集中力を高め、復習によって知識の定着をはかること。宿題が出れば真っ先に片付ける。

学校の勉強は(進学塾等の勉強に比べると)至極簡単に思えるかもしれない。だが、日々の予習・復習のリズムを守り、宿題をきちんとこなし、教科書を隅々まで理解できたと自信を持てるようにすることは簡単なことではない。だがこのような学校での予習・復習のリズムが確立すると、自分の力でプラスアルファの勉強を演出できるようになる。ちょうど、幼児がシンプルな環境の中でこそ様々な遊びを工夫し、創造できるように。知識ではない、この「創造力」こそ大学で一番必要とされる知的基礎体力にほかならない。(次ページ)

私は中・高6年間を通じて平凡な京都の市立中学と府立高校に通ったが、学校での学習は、創意工夫を凝らして取り組むには十分意義深いものであった。

その一つ一つの取り組みは、ここに特筆するまでもなくシンプルなものばかりである。英語は授業中に教科書を完全に丸暗記する(何も見ずに教科書通りの内容を書けるようにする)、数学は解けない問題に印を付け、解法を見ずに解けるまで出来たことにしない、社会は板書をそのままノートに写すのではなく、問題形式に変換して(わざと文章中に空所を設ける等)書き写す、等。試験前だから勉強するというのではなく、気持ち次第で毎日の授業時間が試験勉強に早変わりする。

学校の勉強に真剣勝負を挑めば俄然面白くなるし、さらには教科書の範囲を超えた勉強への渴望も生じてくる。この時初めて、知的好奇心に応える参考書や問題集のたくいが、自宅学習を支える力強い味方であることに気づくのである。親はよかれと思って最初からあれこれ本を買い与えてはいけぬ。

中学生であれ高校生であれ、一日の中で学校にいる時間が一番長い。学校の勉強は普通につきあえば平凡かもしれないが、学ぶ側がアプローチを変えれば、学習の喜びを十分に堪能できるはずだ。親は評論家のように「今の学校」や「今の先生」を批評するのは(子どもの前では)避けた方がよい。何事であれ他者に責任を問うのは簡単だが、安易である。「自分を変えればすべてが一瞬にして変わる」のであるから。

この事実を子どもに伝え、基本的な学習習慣を身につけさせるのは、本来家庭教育の仕事である。それを第三者に委託すると、子どもたちは学ぶことの本質から目を背けることに慣れ、「勉強は塾でやるものだ」などと平気で口にするようになる。この意識が怖い。

「本立ちて道生ず」という言葉がある。基本を大切にすることによって、未広がりには道は広がっていくという意味である。この言葉を残した孔子は「知ることは何か」と問われ、「知っていることと知らないことを区別することだ。」と即答した。ソクラテスの「無知の知」も同じ趣旨の言葉としてよく知られている。すなわち、「無知の知」は「無知の無知」に勝るのである。ソクラテスによれば、人間は(自分も含めて)皆「無知」であるが、それを自覚することが何より大切な「知」であると彼は言うのである。

ここで立ち止まって考えてみよう。学校の勉強は本当に簡単で物足りないものなのだろうか? 自分は真剣に学校の勉強に取り組み、教科書の隅々まで理解できていると胸を張れるのだろうか? 願わくは、生徒一人一人がいつもこの問いを自ら発し、目の前の勉強というチャンスを通して責任ある人間になれるよう日々努めてもらえたらと思う。

(文責 山下太郎)

* 以上は中学、高校生の勉強を念頭に置いて思うところを述べました。ワールドカップでの日本選手の戦いぶりを見た後で書いたもので、少し辛口になったかもしれませんが、ここに書いたことは何かの答ではなく、自分への言い聞かせも含め、何かの問題提起だと思っています。生徒本人または親が、「勉強とは何か」についてめいめいが自分でよく考え、家族の中で話し合うきっかけにしてください。

ところで「山の学校」の母体である「北白川幼稚園」では、半世紀以上にわたり子どもたちは徒歩で通園し、石段を登って山の上の幼稚園に通います。また、年長児は三学期の生活発表会で劇を演じます。両者に共通するねらいは何なのか? 私は昨年度の劇の練習に際して「生涯の宝を育てるために」という一文(園長便り)を保護者宛に書きました。14ページ以下に転載しましたので、あわせてご一読下さい。幼稚園から大学まで、ずっと続く「学びの山道」の全体像とそれぞれの時期に必要な家族の協力のあり方について、ヒントをつかんでいただけたら幸いです。

新しい講師の紹介

四月から着任した新しい先生をご紹介します。

浅野 直樹 (あさのなおき) 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程

宇梶先生の後輩に当たる浅野先生は、現在、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程在籍で、小学生の「ことば」(3~4年)と中学2年生の数学を担当していただいています。わかりやすく楽しい授業をモットーに、生徒の学びを応援してもらっています。

宇梶先生から引き継いだ研究室の後輩の浅野直樹と申します。

緊張しながら4月の春学期を迎えたところ、ことば3～4年、中2数の基本のクラスともすぐに打ち解けてくれてありがたかったです。以前見学に来たときから、みなしっかりとあいさつをしてくれて気持ちよく感じていました。緑に囲まれた環境も落ち着きます。もっとも運動不足の身には登ってくるのが少し大変で、授業後に生徒とふもとまで競走してもとてもかかないませんが。

それではそれぞれのクラスごとに雑感を述べます。

ことば3～4年では、読み書きの反復に徹しました。絵本を声に出して読むことを基本として、話の見所はどこか、どのように感じたかなどを聞くように心がけました。それを一言でもいいので文章に書いてもらうことにしました。生徒たちは本の内容にあれやこれやとツッコミながら楽しく読んでいたのでよかったですと思います。

作文も2回ほど実施しました。本人たちは苦手意識を持っているようですが、まずは出来事を記述することに慣れ、少しずつ自分の意見や考えなども表現できるようになればよいと思います。作文の内容からいろいろ遊びに行ったりしていることがわかり、単調な日常を送りがちな自分と比べてうらやましく感じます。

あとは漢字で、学年にふさわしい問題に取り組んだり、絵本の中に出てくる気になる言葉を練習したりしました。その際に電子辞書を使っていたら、すごく興味を持たれて、貸してあげるといういろいろな言葉を熱心に調べていました。こういった知の探求の姿勢を大切にしたいです。

中2数の基本では、とにかく計算をしっかりできるようになることを目指しました。というのも生徒たちの様子を見てみると、その場のノリで解いているためか、同じ単元の計算問題でも合っていたり間違っていたりしたのです。計算練習の数をこなしたおかげで最初のころと比べるとつまらない間違いは減ったように感じます。やはり繰り返しが大切なので計算に関してはこれからも引き続き注意しながら取り組みたいです。その後に数学の本来の楽しみである、文章題などの実際的な問題を解くことにも挑戦しようと考えています。

「何のために数学を勉強するのか？」という問いはよくなされ、実際このクラスでも聞かれたのですが、論理的(数学的)に物事を考えることは実生活において有用であると信じています。なかなか難しいですが、そういったことにも少しずつ挑戦してゆきたいです。基本的に学校の進み具合に沿って進めているので分野が変わればまた趣も変わるかもしれません。

全体に共通して楽しく学ぶことを最も大切にしています。そのほうが長期的によい結果をもたらすことでしょう。しかし基本をおろそかにしては楽しみもわかりませんので、大切な部分とそうではない部分をこちらで選別して、体系的に教えられるように心がけています。

これから暑い夏を迎えますがみなさまにおかれましては体調にお気をつけくださいませ。また元気に次の機会にお会いできますことを期待しております。

(文責 浅野直樹)

「はじまり」

春は「はじまり」を強く意識させる季節ですが、それは同時に「初心」について振り返って考えることを促してくれるようです。何かが行き詰まったときに「初心に返って」と言われるように、年度が変わることによって、どことなく遣り所なく浮いたようになっている気持ちを少しづつ落ち着けて、我が身を省みるための良い機会を季節が用意してくれているのかも知れません。

さて、私が担当させていただいている、ことば・日本語の読み書きクラスの様子ですが、小学生高学年・中学生クラスは国語の学習の「はじまり」として特に漢字の練習を重視して、毎回問題を解き、答えあわせをし、定期的に復習のテストを行なって定着をはかっています。漢字検定の級でいえば、小学生クラスは5級、中学生クラスは3・4級の内容ですが、やはり自宅での反復練習が大切ですので、この点で学習記録表を自覚的に活用しながら、効率的に復習を行なうことが必要かと思えます。

テキストは、小学生クラスと木曜日の中学生クラスは夏目漱石『文鳥・夢十夜』（新潮文庫）を使用し、小学生クラスは短編を集めた「永日小品」から、中学生クラスは「文鳥」から読み始めています。進度は今までと比べると極めてゆっくりではありますが、テキストの内容を段落ごとに丁寧にまとめ、新しい語句や表現については国語辞典・漢和辞典を活用しながら理解を深め、ことばクラスの共通の目標である「自分の言葉で、自分の考えを述べる」ことが出来るよう、語彙を増やし、表現技術を高めることをしていきたいと思っています。また同時にそうした技術的なものに加えて、小説を読むことで豊かな感受性が養われ、日本を代表する文豪の作品から多くを学べるのではと期待をしています。

火曜日の中学生クラスと高校生クラスは、それぞれ前年度から引き続きアリストテレス『弁論術』（岩波文庫）、ヤスパース『哲学入門』（新潮文庫）を取り上げていますが、こちらはどんどん読み進めながら、古代と現代というふたつの時代を生きた哲学者の思考を追い、生徒と講師の間で自由に意見を交わし、内容を概括的に捉えることが出来るようトレーニングをするわけですが、その際には、特に文章の持つ論理構造について注目をしつつ、その主張に対して自分はどのようなことを考えるのか、どう考えるのか、を探っていきます。内容は具体的なものから高度に抽象的なものまで多岐にわたりますが、たとえ非常に抽象的で難解な概念が提示されたとしても、それを自分の経験や日常の具体的なことに即して考えようとしてみると、実は意外にわかりやすい考え方であることがわかったりして、まさにヤスパースの言うように「叡智は私たちが自由であることを欲した」という言葉の意味を自分たちは体験しているのかなあ、と感じたりもしています。

また、高校生クラスに関しては、受験生ということもあり、センター試験の国語の過去問題に挑戦し、解説を行ないました。現代文の問題文は著作権の問題もあって18年度からはインターネット上で公開はされなくなってしまい解説が不可能な部分もありますが、古典（古文・漢文）については、とりわけ文法事項を中心に復習を行ないました。古文においては助動詞の意味や活用を丸暗記することが大切ですが、記憶は時間とともに薄れて行くものなので、継続的に暗記しなおすことが必要となってきます。忘れたな、と思った頃にもう一度辞書や文法書を紐解いて繰り返し確認をしてください。そうすることによって、記憶はより忘れにくく確実になってきますし、また、古文にしる、漢文にしる、どちらも繰り返し音読することで、身体的な感覚として身につけてくるところがあると思います。

そういえば、夏目漱石は落語がとても好きだったという話ですが、授業で音読を聞いているときに、漱石の作品には落語の特徴、すなわち、ひとりがたりの持つ独特のリズムが、言葉の運びや語句の選択のひとつひとつにあらわれているようです。そんなところも、これから深く味わっていければと思っています。

（某）

春学期を一緒に過ごして(かず1～2年)

昨年に引き続き、亮馬先生とともに低学年のかずのクラスを担当している下村麻紀子です。

去年は1年生だけだったかずのクラスですが、今年は進級した2年生と新しい1年生の3人で始めました。違った学年の勉強に最初はとまどいもありましたが、子どもたちがもともと知った仲ということもあり仲良く学んでいけていると感じます。普段の授業ではお分かりだと思いますが、1人1人自分が選んだドリルを進めながら、亮馬先生に作っていただいたかけ算の表を使っています。

2年生に関しては、2年生というお兄さんになった自覚からか1年生の子に対して「僕が教えてあげる」ということばが出てくるようになりました。時計やかけ算など、これからどんどん活用していける部分が始まりました。未知の部分が多いので、1日に進むことのできるページ数は減ってしまっていますが、その分密度を濃く定着させていきたいと考えています。Uくんは一定のペースで問題を進めていく力があり、自分の知らないことへの探究心も素晴らしいです。また、順序を追って文章問題を解決していくこともできます。Mくんは集中したときに進むページ数は早く、また一度やったことの定着力もあります。

1年生のSちゃんは計算問題や文章問題にほとんどつまずかず、ドリルを着々と進めています。お家でのがんばりもあってそのスピードはすごく、1～2週間でドリルを1冊終わらせていっています。小学1年生の分野に関してはほぼすべての問題をできるようになっていますので、今後はいろいろなドリルなどを使って計算のスピードをあげていけるようにしたいと思います。また、かけ算は2年生のお兄さんたちに混じって一緒に学んでいけるので2年生の分野にも少しずつ進んでいけたら、と考えています。

春学期を通して今後の課題としては、集中力の継続(勉強するときと休憩のときのメリハリ)を個々に対応していかなければならないということがあります。どうしても1人が休憩して騒ぐとつられてしまう傾向にあり、また授業の始まりのときに今からは勉強、という気持ちの切り替えを少しずつでもしていけるようにしようと思います。

先輩になって(中2・英語の基本)

中学1年に引き続き、中2英語を担当しています。去年は中学に入ったばかりで初めて尽くしの2人ですが、今年はクラブや勉強、テストにも少し慣れがでてくるように思います。

ただ、中学2年生は一番その後の学力に影響してくる学年なので自分たちで自覚しながら勉強していくことが大切です。そのことに関連して、最近2人揃って宿題忘れが目立ちます。宿題をするのを忘れた、持ってくるのを忘れた、宿題が出ていることさえ忘れていたなどさまざまですが宿題は家でしてこなければならぬ分野ですので、ご家族の方からも声かけなどしていただけると幸いです。よい点としては1年生のときには遅刻が目立ったJくんが今年は遅刻がほとんどなくなりました。代わりにMちゃんが最近になって遅刻が増えてきています。1年生のときにはなかった分残念に思います。しかし、ついてからはすぐに筆箱とノートを出して勉強するという切り替えは早く、素晴らしいです。

授業中に関しては、1年生のときと比べると確実に静かにできているように思います。そのあたりはさすが先輩、といった風を感じます。主に学校の教科書を使って授業を進めています。授業内容も1年生のときより構文などが多数出てきているため四苦八苦しているようですが、ひとつひとつ丁寧に覚えていけば難しいものではないということを伝えていきたいと思っています。単語の覚え方も順に語呂あわせではなく、発音やパターン化して覚えていくようにしていきたいと考えています。教科書は覚えなないといけないことだらけ、と感じがちですが裏を返せば、教科書を覚えるとさまざまな問題に対応していく力がつきます。

今後の課題としては、Jくんは構文や教科書の本文を覚えていることは素晴らしいですが、その文の中に単語のミスが目立ちます。書いているはずの単語が多いので見直しをする、という癖をつけることが大事です。Mちゃんは単語はきちんと書いているのですが、間違った問題のやり直しのときにただ上の文を写していて、覚えられていないという点が挙げられます。構文を覚えるつもりで文を書く、という心構えが必要になってきます。2人のよいところを足して割っていけるようにしたいと考えています。2人ともいろいろなことに挑戦して集中することには長けています。夏休みを挟んでも、1学期のことがまるっきり抜けているということのないとうに日々の勉学に生かしていってほしいと思います。

(文責 下村麻紀子)

小1・ことば

このクラスでは、ひらがなを正確にかけるように心がけています。初回の授業では、自分の名前や家族の名前など、知っている人の名前を全部ひらがなでノートに書いてもらいました。知っている人の名前には、「ばしょう」や「ぶそん」という名前もありました。子どもたちは幼稚園時代にかかなりの数の俳句を覚えたこととなります。「目には青葉・・・」など園で習った俳句を思い出しながら、今度はそれをひらがなでノートに書き写す練習を繰り返しています。耳に残っている言葉の音を頼りに、それを文字で表現する練習は国語の力を伸ばす上でも、将来英語の学習をする上でも有効だと思っています。

小2・ことば

このクラスでは学校で学んだことの復習を大事にしています。今は「漢字検定10級」の問題に取り組んでいます。10級は小1レベルなので、よい復習になるのです。一般に塾では学校で教える知識の先取りをしますが、私は、学校で習ったことを復習し、何度も繰り返し確実に習得することのほうが、将来学ぶことに対する自信をもつ上では有効だと考えています。復習だからこそ、教え方にも工夫が凝らせます。たとえば、すでに知っている漢字についてはその音読みを教えたり、筆順を再確認したり、それなりに学ぶべきことはまだまだ残っています。

中1・英語の基本

学校教育で学ぶ英語は昔も今も文字が中心です。それは入学試験の内容を見れば一目瞭然です。国語も英語も音を無視して学習できるわけではないのですが、音を使っているだけでは応用の利く知識として定着しません。ちょうど幼稚園で俳句を耳で学び、小学校のクラスでそれを文字に書いて確認することが新たな刺激となるように、まずは英文の発音を繰り返し、自信が持てるようになったら教科書の文字をそのまま正しく筆写する練習を繰り返します。

中1の1学期は簡単な会話のやりとりが中心ですが、「教科書に書いてあることはなんとなくわかる」という曖昧な理解に甘んずることなく、「教科書は見ないでもそのまま書き写せる」というレベルまでせつせと指を動かすように指導しています。

中3・英語の基本

中3になると、すでに学んだ英語の知識に関して復習すべきことは山ほどあります(これはすべての生徒にとって言えることです)。クラスでは前半で中1からの勉強を復習し、後半は学校の教科書を復習しています。私の言う復習とはすでに習ったことを材料として、より高いレベルで勉強に挑戦する「攻めの復習」です。具体的には、既習箇所について

- 1) 教科書を音読する際の速度を上げる
- 2) 教科書を暗唱する
- 3) 教科書を暗写する(見ないでも正確に復元できる)

の3ステップをとります。1)では、音読するごとにタイムを測定し記録します。1単元の英文につき、何度も音読を繰り返すこととなります。繰り返す内にタイムはどんどん短縮されていきます。2)も大事ですが、3)へのつなぎです。2)で終わってもいいのかもしれませんが、試験で点は取れません。3)までこなして初めて試験で満点がねえれます。1)~3)は私が横にいなくても、自宅でその気になればいつでもできる学習法であり、それに気づいてもらえると後は一人でも英語の力はぐんぐん伸びていきます。

高3・英語の基本

高3の英語は新たに教えるべきことは何もありません。ただ、基礎の復習ができていない場合とできていない場合で対応がまるで異なるだけです。

今私が担当しているクラスの生徒の場合、英語の基礎がしっかりできていますので、授業では語彙力の増強に取り組んでいます。普通は、基礎の力がない生徒に限って「単語を覚えて何とか点を取ろう」という神頼み方式に陥るので、そういう場合は中学用の問題集を解かせることから始めます（この場合でも夏休み中にきちんと基礎力を磨けば、秋以降大学入試に対応できる力が飛躍的に伸びます）。

一方、早い段階から基礎力の身に付いた生徒の場合、より高度な英文に挑戦するためにも、語彙の増強を図る必要があります（最後は単語の力で決まります）。クラスでは英検準1級の問題演習を通し、辞書を引くチャンスを増やしています。その際、語源、派生語、反意語、類義語などに注意させ、1つの単語を引いたら同時にそれに関係する5～10の単語を同時に学習するように誘導します。準1級の問題は語彙に関してはセンター試験よりも難しく、未知の単語が頻出します。これらの問題を辞書を引きながら解くのは時間も耐力も必要なので一見非効率的に見えますが、語彙の習得に関しては単語集の丸暗記より断然意義深いと思いますし、何より「センター試験の問題は易しい」という揺るぎない自信が身に付きますので、文字通り「急がば回れ」だと思えます。

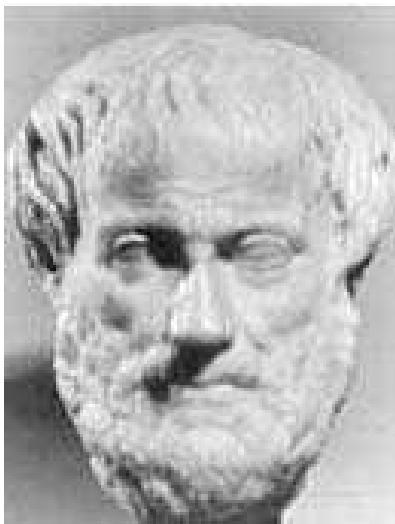
ラテン語中級講読 A(キケロー)

前学期でキケローの『老年について』を読了し、今学期からは同じくキケローの『アルキアース弁護』に挑戦しています。当初「山の学校」でラテン語文法のクラスを開講したとき、いずれキケローを読むクラスが成立するとは夢にも思いませんでした。その後2年がかりで『老年について』を読み終えたとき、登山で山頂に立った気持ちになりました。『アルキアース弁護』は法廷弁論の一つですが、キケローの学問観が随所に読み取れ、読んでいて楽しい文章です。

ラテン語中級講読 B(ウェルギリウス)

前学期からウェルギリウスの『牧歌』を読み始め、今その中程にさしかかっています。この作品はヨーロッパでもっともよく読まれた詩の一つで、その影響を語り出せばきりがありません。今、クラスではその作品の一字一句を大切に読みながら、私自身、生まれて初めてこの作品を読んだような新鮮な気持ちになっています。文法に照らして正確に原文を読んだ後は、参加者めいめいの解釈を披露し合いつつ楽しく授業を進めています。『牧歌』の次は『農耕詩』、『アエネーイス』とウェルギリウスの作品を追いかけていきたいと思っています。

(文責 山下太郎)



日本語の読み書き

講師：某

中1 木曜日 pm 6 : 40 ~ 8 : 00

中2 火曜日 pm 8 : 10 ~ 9 : 30

高校 火曜日 pm 6 : 40 ~ 8 : 00

毎授業、テキストを少しずつ読破しながらそれに基づいた作文、小論文、討論を行っています。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今もそして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！

山下育子 しぜんだより「春学期(4/11~)をふり返って」

4月25日のクラス テーマ“いちご苗を植えよう！”

昨春の体験で、お山に自生する“よもぎ”を摘んでみんなで「よもぎだんご」を作りましたが、今年も何か作りたい！というリクエストに応じて、この春は“いちご栽培”をしました。そして、たくさん実が成ったらお楽しみをしましょう...ということになりました。そこでまずはじめに、いちごについて少し考える時間をもちました。

質問その1 人間はいつ頃からいちごを食べているのだろうか？

『大むかしの生物』の図鑑をみんなで見ました。[生物のいない時代][バクテリア・ソウ類の時代][海の生物の時代][魚類の時代][両生類の時代][は虫類の時代][ほ乳類の時代]をたどっていくと、次は人類が出現した今から何万年も前の**石器時代**の様子が描かれていました。人類は当時、石でつくった道具で狩りをし木に登って実を取ったり果実を摘んで食べていたことも描かれていました。石器時代のスイスの住居跡から、いちごの種が発見されたということでした。

☞ <日本では平安時代、清少納言が「枕草子」の中でいちご(覆盆子(フクボンシ)=日本に古来より自生する野生イチゴ)について書いており、また江戸時代末期1840年頃にはオランダ人からいちご(ほぼ現在の栽培いちご)がもたらされ、はじめは「オランダイチゴ」と呼ばれていました。>

質問その2 身近で見かけるいちごには、どんないちごがあるかな？ 思いついた名前をあげてみよう！

手をあげて次々に答えてくれたのは、[野いちご][木いちご][ワイルドストロベリー(ハーブの種類)][草いちご][ヘビいちご]などでした。食用にお店に並んでいる[いちご]には、[さちのか][とよのか][によほう]などの名前がついた種類があるね。いちごは、ビタミンCが多くレモンの2倍、でも30秒以上水につけるとせっかくのビタミンCが流れてしまうそうです。

☞ <いちごは英名ストロベリーと言いますが、つる(ランナー)を伸ばして繁殖する=あちこちに散らす(strew ストルー)ところからストロベリーと名付けられたとも、傷つき易いいちごを麦わら(straw ストロー)に包んで栽培したことからそう名付けられたとも言われています。>

では、いよいよ外に出て、いちご苗を植えましょう！

準備物/プランター、スコップ、手袋、土、鉢底石、野菜の肥料、苗、水



1人ずつプランターを並べて



鉢底石を敷いたら土を入れて



すぐ横に自生していた草いちご



この土気持がいいなあ！



苗を入れて土をそっと押さえます



ほらっ、できたよ！



陽当たりのよい場所に移動



みんなピースで出来上がり

身近ないちごを使って屋外で土の感触にふれ、焼杉プランターに時間内に植え終わりました。準備作業として、ダンボールから沢山のプランターを取り出したり、大きな重い土の袋を仲間と力を合わせて次々に運ぶ様子は一人一人大変積極的でした。美しい夕焼け空が広がった5時過ぎ、一人ずつ交替でホースリールを手にしてお水をあげました。「ほーら、いっぱいお水をあげるよー」「そや、あの太陽にもお水をあげよう」と楽しそうに水撒きをしながら話している声が聞こえてきました。手に持った水のシャワーのあちらからは、夕焼けが照り輝いていましたが、子どもたちの笑顔もそれと同じくらいキラキラと輝いていたのが印象的な一日でした。

5月30日のクラス テーマ“クスノキから防虫グッズを作ろう！”

前回5月16日のクラスでは、お山に生えている“クスノキ”を使って、ノコギリを使う体験をしました。

クスノキについて

このお山には大きなクスノキが何本かあります。クスノキは高さ20mにもなり、学校にもよく植えられている木です。秋には黒っぽい実をつけて赤や黄色に紅葉した落ち葉が美しい。このクスノキの枝や根から、防虫剤の樟脳が作られます。防虫効果があるので家具や仏像などにも使われました。早速、クスノキの葉を一人ずつ手に取って、葉に傷をつけたりもんでみると、独特のよい香りがしました。

〔準備〕 予め剪定した5、6年目の枝を何本か用意し、木の皮をナイフで削ります。

準備物/ノコギリ、軍手、クスノキ

〔作業〕 二人一組のペアになり、直径5cm~7cmくらいの枝を選ぶ。左手でしっかりと押さえ体重を乗せて固定し、約1cm~1.5cm幅になるようにノコギリで切っていきます。木が動かないように、もう一人が木を押さえ補助します。

〔取組〕 枝が生長して数年目の柔らかい枝とはいえ、一枚一枚切っていくのは相当忍耐のいる作業でした。力の入れ方を工夫すると要領がわかり、何枚も勢いをつけて削っていけました。同じ大きさではなく、大小とりどりの枝をスライスして楽しむペアもありました。時間をかけて丁寧に作業をしていたところは、山の学校の大学生講師の先生も受け持ちクラスが始まる前に手伝って下さり、それぞれに個性豊かな木片が沢山出来上がりました。

防虫グッズ作り



上の方に穴を開ける



中目のサンドペーパーで表面をゴシゴシ磨いていく



丁寧に1個ずつ



いろいろな色の紐を通したよ



ぼくは2色つかった



よく磨いたら表面がツルツルに



ぼくは赤い紐だ



ほら、両手と首にぶら下げた



パッチリできあがり



嬉しいなあ、妹にもあげる



完成、こっちとこっち

ノコギリを使った日も、製品を仕上げた日も、最後まで無事予定を終えることができました。教室でクスノキを一斉に磨く作業をした日には、山の学校中、クスノキのよい香りが漂っていました。ハンガーや洋服ダンス、下駄箱などに吊して使えます。100%自然素材で安心。香りがなくなれば、表面を磨くたびによい香りが出てきます。

*毎回、クラスのはじめに「しぜん日記」を声に出して発表してもらっています。大好きな昆虫のこと、しぜんにまつわること、みんなに伝えたいことは、かわいい絵入りの日記が届いています。

6月13日のクラス テーマ“いちごでジャムを作ろう！”

4月末に植えたいちごは、ランナーを広げて沢山の白い花を咲かせ、花が終わるとそこから小さな実が顔を出していました。赤い大きな実がたくさんできたので、採りためて冷凍にしていたいちごも合わせて、いよいよいちごジャムを作ることになりました。

まずは、容器を一人ずつもって、自分のネームプレートを立てたプランターのいちごから摘んでいきました。虫がついているものや熟れすぎているものもありましたが、1個ずつ大切に採りました。次は、3班に分かれて作っていきましょう。



いちごの白い花と赤い実



草の下に隠れているもある



表面がツルツル光っている



まあまあ採れたかなあ

〔いちごの種類は、四季咲きいちごの“夏あかね”〕

〔いちごジャム作りの手順〕

いちごのヘタを採り水を張ったボールの中で実をさっと洗ってよごれを落とす テーブルのお鍋の場所に帰り、採ったいちご+冷凍いちご+お砂糖を入れ火にかける あまり掻き混ぜず煮立ってくるのを見守る 煮立ったらアクを取りさっと混ぜて水分が少なくなるまで煮詰める レモンを絞って入れる(色鮮やかになる)



いちごお鍋に入りましたー



うまいくかなあ



お砂糖入りまーす



よし、炎は安定している



煮える間、しぜんトークン



カブトムシサナギのお客さん



コクワガタ2匹で力くらべ



サナギは動くけどあまり触らない



そろそろ種をとってレモン絞るよ



我ながら美味しくできたなあ・・・実は煮たいちごを入れた下にはバニラアイスが入っていました！



お鍋が煮えてきたら、「先生、アク取るんでしょ」とか、また別の子が「嘔いてきたら、こうして少しフタをずらせばいいんでしょ」と、こちらが伝えなくてもそれぞれのよいタイミングで試みており、よく知っていることに感心しました。感謝しつつ成果をいただくには手で作ることができる、そして土の恵みを知って育てることができる、何でも経験して逞しく強く成長してほしい小学生たちです。(文責 山下育子)

「しぜんクラス」からのお知らせ

例年夏休みに、小学生しぜん教室の授業として「ワクワク自然教室」を実施してきましたが、本年度は下記の事情により開催を見合わせるようになりました。

まず、従来は正規の授業2回分を8月中に行う必要がありましたので、8月末を活用しておりましたが、今年は9月スタートのスケジュールで予定のコマ数を充足できる状況となりました。次に、昨年までは特別にお手伝いいただけるスタッフの数にも恵まれ、特に昨年は1泊2日の体験教室を企画できるほどでしたが、今年は同規模のイベント(昨年は30名近いお申し込みを頂戴しました)を安全に実施するのに十分なスタッフの人数が足りません。以上のことから、「しぜん教室」としては、9月から始まる1回1回の授業を、より一層大切にしていきたいと考えております。お問い合わせ、またご期待下さった方にはまことに申し訳ございませんが、諸般の事情からあしからずご了承下さいませようお願いします。

「雑感」 ドリルについて

小学生のかずクラスは、1～2、3～4、5～6年の学年ごとに分かれて学習しています。なるべく薄いドリルを使用して、一冊ずつその達成感を味わいながら取り組んでいます。

一般に「子どもにドリルをさせる」というと、ネガティブな印象を持たれてしまいそうですが（私自身、最初そのように思っていました）、ドリルを一冊終えた生徒が、「私はこれを終えた」という自信に胸を張っている様子を見ると、案外それが大人の空想であったように思われます。

最近、驚いたことがありました。それは、次の新しいドリルをもらった1年生の生徒が、お迎えの時、お母さんにささやいた一言にでした。それまでのいきさつを述べると、市販でいいドリルが見つからなかったため、手作りのドリルをいくつか渡していました。それもなくなりかけていた頃、お母さんには「（残りページが少なくなって）あんまり宿題ができませんが、今週はちょっとセーブしておいてください」と声をかけておいたのです。そうして、次の週、ようやく見つけて買って来たドリルを渡しましたのでした。その生徒はさっそく頭の体操とばかりに、みるみるページをくっていきました。

「がんばったねえ」とまた、玄関口で私はその生徒に言葉をかけました。そして「...何かご褒美ないかなあ」と思わず言いかけてしまいそうになったのです。けれどもその生徒は、お母さんの前に行くと、そっと手提げかばんの中からドリルを覗かせて、ささやき声でこう言ったのです。「帰ってから、してもいい？」と。

私は、普通ならこの逆なのになあ...と心から感心しました。そしてお母さんが何と答えるのだろうと思って耳をそばだてました。すると、「...ええ、でもごはんを食べてからね」とやさしく言われたのでした。そしてその言葉の余韻から、きっとご飯の後のお手伝いをした後に、ドリルをすることになるのだろうなあという雰囲気伝わってきました。

その絵のような会話を聞いていると、私まで幸せな気持ちになりました。そしてこの時期には本当に何のご褒美もいらぬのだなあということ、はっと考えさせられました。「できなかったことが、できるようになった」そのこと自体が、いわばご褒美なのです。

そのように実際、低学年の頃は、むしろ新しい刺激を求めるように、積極的にドリルに取り組む姿が見られます。それは幼稚園時代に期待していたことが、ようやく解禁になるからだろうと思われます。

さて問題は、高学年になるにつれ「新鮮味が薄らいで来る」という点ですが、それには誤解があるように思います。というのは、もしそうだとすると、1年生のうちにすべてを習ってしまったことになるからです。けれどもそのようなことはないでしょう。

どの学年にも、新しく学ぶことがあります。従ってそのつど新しい期待がともなうはずですが、それでもいつの間にかやら算数は、「何が一番好き？」とたずねるよりも「何が一番嫌い？」と聞いた方が早く出てくることになってしまいます。あんなに最初はワクワクしていたのに...徐々に期待通りのものになくなっていくのだとすれば、それはなぜなのでしょう。

中には「本当に算数なんて期待はずれだった」と言いつつつかかって来る小学生がいるのかもしれませんが、私にはそれはどこか真剣に努力した人の言葉ではないように聞こえます。当時の自分を思い出すと、やはりそこには自分にしか知られない（人にはそと見がばったと見せかけられる）葛藤があり、「いつでも勉強できる」という環境の上であぐらをかいた、怠け癖があったように思います。もし世の中に片手間で作って面白く感じられるものがあるとするならば、それは本当に面白いものなのだろうか...勉強というものはそれでいいのだろうかとも思います。

私はやはり何よりも、生徒には、しんどさと喜びとがセットであることを教えなければならないと思います。そのために、積み残しが始まる中学年・高学年の時期は、一緒にドリルに付き合わなければならないと思います。そして一個一個、「できなかったことが、できるようになった」という鍵を開ける喜び それは何年生になってもあるはずのものを掴み取るところまで、一緒にいたいと思います。

（文責 福西亮馬）

前川 裕

ラテン語初級講読・ラテン語入門(初級文法)担当

ラテン語初級講読

最初は前期から引き続き『ピーターラビットの冒険』のラテン語版を読みました。このラテン語訳はたいへん良くできていて、文法事項については易しいものから難しいものへと順々に出てきています。ほとんどの初級文法に関する事項が出てくるので、文法を終えてからの最初のテキストとして最適なものの一つでしょう。

その後は、『くまのパディントン』のラテン語版を読み進めながら、文法の確認をしています。こちらは本格的な訳で、古典文学とそう変わらない難易度になってきます。しかし場面設定は現代的なので、文脈などの背景はつかみやすく、パディントンのユニークさを楽しみながら読んでいます。次期も、引き続きパディントン(第1章終了まで)を読む予定です。受講者の希望にあわせる予定です。

ラテン語入門(初級文法)

教科書に『ラテン語初歩』を使って、初級文法を一から学びました。基本的には問題演習が中心ですが、必要に応じて文法講義が主体となることもあります。現代語との語彙的・文法的な関連などを通して、ラテン語と現代との(時に意外な)つながりを知ることができています。

次期は、また最初から文法を学びます。演習形式か講義形式かは、受講生の希望にあわせて検討いたします。ラテン語の知識は、一生の財産です。Festina Lente!(ゆっくり急げ!)で始めてみませんか?

(文責:前川 裕)

第6回 ラテン語のゆうべ



* 前回の夕べ(講師:山下太郎)の様子

「ラテン語を楽しもう！」

~ 退屈している暇はありません! ~ (無料)

8月25日(金) 午後7時~8時30分

講師 前川 裕

場所 第3園舎

対象 ラテン語に関心のある方

講師からのメッセージ

「ラテン語」をご存知ですか? 古代ローマ時代の言葉は、現代にもいろいろな形で受け継がれています。現代に生きているラテン語を見ていながら、ラテン語を始めるための一歩をお手伝いします。インターネット上のラテン語サイト、携帯電話で読むラテン語なども紹介予定!

ウェブ・プログラミング入門

時間 木曜8:10～9:30

日程 9月7日～11月30日 (12回授業)

対象 高校・大学・一般

講師 Fujita (山の学校講師)



```
index.cgi
push( @items, new Link( $user->name(), list_url() ) );
push( @items, [
    new Link( Word->new( "Option" ), mode_url( "option" ) ),
    new Link( Word->new( "Logout" ), logout_url() ),
]);
} else {
    push( @items, Word->new( "User" ) );
    push( @items, [
        new Link( Word->new( "Login" ), login_url() ),
        new Link( Word->new( "Register" ), register_url() ),
    ] );
}

# RSS
push( @items, Word->new( "RSS" ) );
my( @rss ) = ( new Link( Word->new( "LoungeRSS" ), rss_url( "lounge" ) ) );

my( $menu_mode, $menu_id ) = @_;
if ( $menu_mode && $menu_mode eq 'category' ) {
    push( @rss, new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url( "category", $menu_id ) ) );
} elsif ( $menu_mode && $menu_mode eq 'topic' ) {
    use Topic;
    my( $category_id ) = Topic->topic( $menu_id )->category_id();
    push( @rss,
        new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url( "category", $category_id ) ),
        new Link( Word->new( "TopicRSS" ), rss_url( "topic", $menu_id ) ),
    );
}
push( @items, \@rss );

# Search Form
my( $search_title ) = Word->new( "Search" );
my( $search_word ) = utf8( $q->param( "find" ) ) || Word->new( "Search" );
#push( @items, { STRING => $search_title, HREF => search_form_url() } );
push( @items, $search_title );
my( $checked ) = " ";
```

▶概要

現在、多くの人がインターネットを利用している。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合もある。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用をしている人は全体のごく一部でしかない。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いない。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができる。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ね XHTML と CGI (Perl) を扱う予定です。XHTML は、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGI は、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。その他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

学校法人北白川学園「山の学校」

〒606-8273 京都市左京区北白川山ノ元町 4 1

TEL / 075-781-3215 FAX / 075-781-6073

Email / taro@kitashirakawa.jp

勉強の習慣づけは家庭から

以下の一文は、小学校入学直前の保護者に園内でお配りした原稿です。中学からの主体的学習を支える鍵は、小学校時代の家庭学習にあります。巻頭エッセイとあわせてご一読下さい。

平成 18 年 2 月 3 日

園長便り 5

年長児の劇の練習について 生涯の宝を育てるために

年長クラスでは、保護者会の翌日から劇の練習を始めています。練習の初日にはみんなで過去の発表会のビデオを観ました。「次は自分たちの出番だっ！」とみんなやる気満々です。年長児の保護者におかれては、4月からの学校教育に対して色々ご不安もあるかと思いますが、本園では半世紀以上にわたり、劇の練習を通して、親子ともども大きな自信をつかんでいただきたいと願い、幼稚園生活最後の生活発表会では劇に取り組んでもらっています。おゆうぎやリズムバンドと違って、劇の練習はご家庭での練習が何より大切です。お一人お一人役が違いますので、園の全体練習の中で自然に台詞を覚えるというわけにはいきません。また、台本はすべてひらがなで書いてありますが、お子さま一人の力でそれを覚えることは無理な相談です。

たとえ5分でも毎日親子で練習を続けることが大切です。家で十分に練習をしてきたお子さんは、お顔が晴れ晴れしています。逆に練習をしてこなかったお子さんのお顔は、心なしか曇っています。この1ヶ月、こつこつ練習を続けることができたお子さんは、園での練習にも自信を持って取り組むことができます。その結果、精神的に一回りも二回りも大きく成長され、自信をもって小学校生活に入っていけます。私は生活発表会の成功のためというより、それぞれのお子さんご自身の、今のそして未来の幸せのために、この機会を最大限に生かしていただきたいと心から願っています。

幼稚園と異なり、小学校からの生活の中心は教科の学習になります。その鍵を握るのがご家庭での「勉強の習慣づけ」 予習・復習を欠かさない です。この「習慣づけ」は、お子さんにとって生涯の宝になります。学校や塾の選択に最大限の注意を払っても、この「習慣づけ」を本人任せ、他人任せにする保護者は少なくないようです。「勉強しなさい！」と子どもに言う親は多いのですが、いっしょに勉強を見てあげる親は案外少ないのです。

ここで、本の読み聞かせのことを思い出してください。「本を読みなさい」、あるいは「うちの子は本を読まない。どうすれば読むようになるのでしょうか？」と心配する親は多くても、本の読み聞かせを実践する親は案外少ないのです(本園の保護者は別かも知れませんが)。親が子どもに本を読んであげることは義務でなく喜びのはずです。親が子どもに勉強を教えることも同じなのです。読書に関してても、「お母さん、この本読んで！」と子どもから頼んでくるうちが花なのです。

勉強も同じです。小学校の1年生は、人生で一番好奇心にかがやいています。子どもにとっては小学校に通って勉強することが何より楽しみなのです。子どもは「今日はこんなことを勉強してきたよ！」と学校での経験をお母さんに話したくてたまりません。学校の教科書をお子さんと一緒に開けてお話タイムを持つことは、親子の絆を深める楽しいひとときになります。それぞれのご家庭で生活リズムが違うと思います。学校から帰ったら必ず宿題をするよう一緒に時間を過ごすのもよし、食後にその時間をとるのもよし、朝学校に行く前に教科書の音読をさせてから送り出すというスタイルでもよし、です。お母様がお忙しい場合、お父様が新聞を読む時間を少し割いて、お子さまの勉強を見てあげることを習慣化してもよいでしょう。どうか、各ご家庭で工夫されて、お子さまとの勉強タイム 今は劇の練習タイム を必ず5分は確保し、その時間を歯磨きや入浴同様、日常の習慣にされますように。

以上のような提案をいたしますと、親の主体的な関わりが「子どもの自立の妨げになるのでは？」と不安を持たれることがあります。では、本の読み聞かせについてはどうでしょうか。字を知らない子どもが一人で本を読むことは不可能です。最初は親が読んで聞かせることから読書体験は始まります。親の主体的な関わりなしに、子どもが一人で本を読むようにはなりません。本好きな子どもは、きまって親との楽しい「読書タイム」を幼少時に経験しています。勉強についても同様です。

(次ページ)

「小学校に入ったのだから自分で勉強しなさい」と口に出すのは簡単ですが、子どもの側に立ってこの言葉を受け止めれば、それがいかに残酷な表現であるのか気づきます。子どもは親がいなければ一人で勉強の習慣を身につけることは絶対出来ないのです。赤ちゃんの目の前にご飯を用意し、「一人で食べなさい」と命令する親はいません。いずれ一人のできるようになることは自明ですが、まずは「授乳から」ではありませんか。赤ちゃんへの「授乳」を「甘やかし」と不安視する母親はいないでしょう。絵本の読み聞かせも、親による勉強の習慣づけも、子どもが立派に成長するための「精神的授乳」にほかならないのです。逆に、この経験をもたぬまま、身体だけ大きく成長した子どもたちが、どれだけ精神的栄養失調に苦しんでいるのか！学校で起こるさまざまな問題の根源はここに 있습니다。

親による勉強の習慣づけは、小学校低学年においてもっとも大切です。学校の先生はクラスの30人を相手に授業をされています。一人一人の子どもの勉強を親のように丁寧に見ることは事実上不可能です。子どもが漢字を筆写するとき、その筆順が正確かどうか、鉛筆の持ち方が正しいかどうか、計算間違いの癖はどこにあるのか、先生は一人ずつについてくまなく見ることはできません。でも、親は違います。目の前のお子さん一人だけを見守ることができるのですから。

子どもを取り巻く学習環境は親にとって気になる話題ですが、うわさ話に花を咲かせる格好の話題であっても、それがご自分のお子さんの勉強を具体的にどう見守り、導いていけばよいのか、その明確な指針を提供することは永遠にないでしょう。ご自分の子どもの教育にとって、もっとも本質的な改革とは、いつも親自身の意識改革に他なりません。世間的に「よい」とされる教育環境をお子さんが生かすためにも、逆に「よくない」と評される環境にあっても、本人がそれを己の怠慢の言い訳にせず、たくましく成長するためにも、「親による子どもの勉強の習慣づけ」は、いつも現状をよりよく変えていくための一番大事な鍵を握っています。

難しいことは何もありません。「宿題をやりなさい」と口で言うだけでなく、子どもの横について、勉強に取り組む子どもをしっかり見守ることでです。国語の教科書を目の前で音読させ、正すべきところは正すこと、漢字の書き取りや計算ドリルの答え合わせ、かけ算の九九の朗唱など、子どもがハードルを一生懸命乗り越えるとき、いつもそばにいて見守ってあげてほしいのです。子どもが将来、勇気をもって困難に挑戦する心の支えを培うために。

本園の徒歩による登園にせよ、「劇」の練習にせよ、その目的は同じです。子どもたちが自分の足で人生を歩いていく、本当の自信を培ってほしいという願いが根底にあります。困難にぶつかったとき、何かのせいにして逃げることは誰にでもできます。安易で楽な道は、見回せば、いつでも、どこにでも、いくらでもあります。しかし、本園の子どもたちは違います。雨が降っても、雪が降っても、自分の足で元気に山道を登って幼稚園に通います。それを毎日当たり前と思い、当然のように繰り返しています。この「習慣づけ」を「よい」と判断したのは子どもではなく親です。その導入にさいし苦勞をものともせず子どもたちを見守ったのは他ならぬ皆さんです。どこかで親が音を上げ「ノー」と思ったら、今の子どもたちはいません。「学問に王道なし」と言います。小学校から始まる「学びの山道においても王道なし」なのです。最初が肝心です。「文字を使って学ぶ」初期の段階において、子どもたちはまだよちよち歩きの状態です。その最初の導入にさいしては、1日5分、おさまと一緒に「学びの山道」を歩く練習につきあってあげてください。

幼稚園であれ小学校であれ、子どもたちを幸福に導く教育の原理は同じです。上で述べてきた、親子で取り組む「勉強の習慣づけ」は、必ずやお子さんにとって生涯の宝になるでしょう。困難に直面したときの心の支えになるに違いありません。学校や塾の選択に最大限の注意を払っても、それを生かすも殺すも、結局は本人の勉強に対する姿勢次第なのです。この姿勢さえまっすぐ確かなものであるならば、どんな環境にあっても、たくましく学ぶ力を身につけるでしょう。今園で始まった劇の取り組みは、親子で取り組む「勉強の習慣づけ」の格好のスタートになるとお考えいただき、「毎日5分間」とどんなことがあっても練習の時間を確保し、練習を継続していただければありがたいと思います。

(文責・山下太郎)

第3回 ミニミニようちえん



「たなばたかざりをつくろう！」(無料)

7月1日(土) 午前10時～11時

場所 つき組のお部屋

対象 未就園児(年齢は問いません)とご家族

親子で七夕かざりを作ってすごしましょう。おみやげにはササをもってかえてね。

第6回 ラテン語のゆうべ



* 前回の夕べ(講師: 山下太郎)の様子

「ラテン語を楽しもう！」

～ 退屈している暇はありません! ～ (無料)

8月25日(金) 午後7時～8時30分

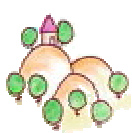
講師 前川 裕

場所 第3園舎

対象 ラテン語に関心のある方

講師からのメッセージ

「ラテン語」をご存知ですか? 古代ローマ時代の言葉は、現代にもいろいろな形で受け継がれています。現代に生きているラテン語を見ていきながら、ラテン語を始めるための一歩をお手伝いします。インターネット上のラテン語サイト、携帯電話で読むラテン語なども紹介予定!



やまびこクラブ

金曜日 4:00～5:30 小学生対象

次回のお知らせ

9月22日 『ダンボール島であそぼう!』

10月20日 『ひねもす・なが～いコンテスト!』

2月9日 『どろじゅん・竹馬であそぼう!』

どうぞお楽しみに!

ホームページ <http://www.kitashirakawa.jp/yama.html>

ウェブログ <http://www.kitashirakawa.jp/yama/>

